

◆ 2018年5月19日講義より

マイノリティと政治

2013年に、日本で初めて、同性愛を公表した国会議員となった、尾辻かな子さん。同性愛者はなぜ日陰者のようにしていなければならないのか、なぜ、異性愛の人と同じように婚姻する選択肢がないのか。社会を変えるためには、自分が行動しなければという思いから政治家となった尾辻さんに、これまで歩んできた道を聞いた。

衆議院議員 尾辻 かな子さん

【プロフィール】 1974年生まれ。同志社大卒。2003年、大阪府議会議員に初当選。2013年、参議院議員に繰り上げ当選。同性愛を公表した初めての国会議員となる。2017年 衆議院議員に当選（大阪2区、立憲民主党）。厚生労働委員会、消費者問題に関する特別委員会所属。立憲民主党副幹事長、つながる本部事務局長、ジェンダー平等推進本部事務局次長、SOGIに関するPT事務局長。社会福祉士、介護福祉士。（一社）LGBT政策情報センター代表理事。



自分でも同性愛者とは 認めがたかった

自分が同性愛者であることを受け入れたのは23歳くらいのときです。自分が、他の人とは違うかもしれないと思ったのが18歳のとき。1990年代のことです。それは自分自身でも受け入れがたいことでした。同性愛者は変な人たちだという社会の刷り込みが自分にもあったからです。

インターネットで当事者と出会い、ようやく本音を語り合う場を見つけた気がしました。しかし、当事者同士、互いにニックネームで呼び合うことしかできない。自分たちはなぜ、まるで悪いことをしているかのようにこそそしめなければならないのだろう。これは、当事者に問題があるのではなく、当事者を受け入れない社会に問題があるのではないかと思うようになりました。

自分が行動すれば 世の中は変えられると気づく

大学生のときに、インターンシップで茨木市議会議員の桂睦子さんの活動を手伝いました。レズビアンであることをカミングアウトし、「政治で社会の何を変えられるのか

かが知りたい」と言って受け入れていただいたのです。すると桂さんが、議会で「性的マイノリティの子どもと学校」をテーマに取り上げてくれました。それがすごく嬉しかったです。

今から18年前のその頃、LGBTを政治で取り上げるのはすごく勇気がいることだったと思います。でも、桂さんが取り上げてくれたことで、私の想いが政治に届いた。もしかしたら社会は変えられるのではないか。しかし、そのためには自分で行動を起こさなければならぬと実感したできごとでした。

28歳で政治家の道へ

私は全く政治には縁のない家庭に育ちましたし、大学の専攻も政治学ではありませんでしたが、いろいろな出会いの中でさまざまな人に助けられ、そのご縁の中で、ここまで連れてこられたのだという気がしてなりません。

28歳のとき、2003年の大阪府議会議員選挙では、旧社会党から無所属になった女性が引退したため、その後継者的な立場として立候補しました。

私にとって幸運だったことは、私

が立候補した堺市は10人区という大選挙区だったことです。10人中10番目の得票数で当選しました。もしそこが1人区や2人区だったら、2世、3世議員でもない限り、そこで女性が選ばれるのはかなり厳しかったでしょう。

カミングアウトの後、 訪れたのは徹底的な「沈黙」

選挙のときに、レズビアンということ公表して運動したかったのですが、周囲からは「当選してから考えて」と言われました。28歳という若さで、無所属で、しかも女性であるということだけでも大変目立っていたからです。

当時の大阪府議会は112人の議員の中で、女性は7人しかいませんでした。112人の中の一人として、私にしかできないことは何か。それは、LGBTの人たちが「マイノリティである」ために被るさまざまな不都合を可視化し解決することだと思いました。これができるのは当事者である私しかいません。

2005年に、パレードでレズビアンであることをカミングアウトし、本を出版しました。その結果、どうなったでしょうか。



▲衆議院本会議



▲衆議院に法律案を提出



▲衆議院 厚生労働委員会



▲東京レインボープライド2018



▲参議院議員時代 アメリカ大使館主催の
LGBTプライド月間レセプションで、開会の挨拶

法律を変え、世の中を変える 国政への挑戦

国政に出て法律を変えなければ社会も変わらないと思います。2007年、民主党の公募で参議院選に立候補しました。しかし、3万8千票で落選。私の上に、5、6人いたので繰り上げ当選も無理でした。

32歳で失業をし、元府議会議員という肩書きになりました。何か仕事をしなければと、ヘルパー2級を取り介護の仕事をし、さらに社会福祉士の資格を取りました。

ところが、2009年に政権交代が起こって民主党政権となり、2012年の野田内閣のときに衆議院解散総選挙がありました。

大阪府議時代からの知人から「まだ政治をやるつもりはあるか」と電話があり、大阪5区から民主党の公認候補として立候補。その半年後、参議院議員選挙があるのでその応援の活動をしていたら、なんと、2013年5月に2007年の参議院議員選挙の繰り上げ当選の連絡がきたのです。忘れたころに来た朗報に、何ごとも諦めてはいけない、と思いました。

マイノリティは マイノリティの味方か？

日本で、レズビアンだとカミングアウトをしている国会議員は私人です。当事者性を出すことに対しては批判も大きいですが。同じレズビアンの人が味方かといえばそうとは限りません。LGBTに限らず、マイノリティ同士だからといって無条件に仲間だとは限らない。中には、わざわざ目立つことをしないで欲しい、そっとしておいてほしい、という人もいます。

オバマ大統領も、アフリカン・アメリカンのみに応援されたわけではありません。自分たちが支持することでおバマは負けるのでは、と思った人たちも多かったそうです。

キング牧師の公民権運動も、決してすべての国民に歓迎されたわけではありません。「仕返しが怖いからやめてくれ、あとでいじめられるのは自分たちだ、そっとしておいてほしい」と思っていた人も多かったのです。

たとえどんなに叩かれても やり遂げる勇気があるか

社会を変えようと思って政治の世界に飛び込みましたが、摩擦はすごくありました。

どんな運動でも、最初の人ほんのすごいエネルギーを要します。

最初の人が樹を切り倒し、第2世代がそこに道を作る。そして、第3世代がアスファルトを敷いて多くの人が通れるようにする。第1世代の人は世間から大変なバッシングを受ける。それでも自分はやるんだという信念を持てるかどうか。政治家にはそこが問われると思います。

ロールモデルを持つことで くじけそうな心を励ます

アメリカで初めてレズビアンであることを公言して当選した上院議員にタミー・ボールドウィンという人がいます。彼女が2000年に行ったスピーチは、いつも私に勇気を与えてくれます。

みなさんも、「この人のようにになりたい」というロールモデルをぜひ見つけてください。それは、自分にすぐく力を与えてくれます。

最後に、タミー・ボールドウィンのスピーチの言葉を借りて、終わりにしたいと思います。

「決して疑わないこと。私たち自身がこの世界を創るのだということ。なぜなら、私たちは、自分たちで未来を決められる、民主主義社会に生きているのですから」

◆ 2018年5月19日講義より

変化を恐れず、 新しいチャレンジを続けよう

イタリア、アメリカでキャリアを積んだ後、日本ではなじみのなかったパブリック・リレーションズ分野で起業。その後、帰国して海外企業の日本市場におけるCSRの仕事に携わる。今は現代アートで街を活性化するプロジェクトに忙しい。その場その場の出会いと判断で、柔軟に変化を受け入れ、さまざまな仕事に関わってきた秋岡久恵さんの生き方から学ぼう。

エヌ アンド エー株式会社 専務取締役 **秋岡 久恵さん**

【プロフィール】東京の舞台芸術学院にて演劇を学んだ後、イタリアに渡り、ペルージャ大学外国人イタリア語学科に学ぶ。イタリアの日本文化会館にて4年間、現地雇用スタッフとして勤務した後帰国。RAI（イタリア国営放送）とNHK 共同制作の番組制作に携わった後、渡米。ニューヨークにてCores Corporationに勤務。34歳のときにウイタンアソシエイツ株式会社設立、代表取締役社長。キャノン、セイコー、トヨタ自動車等日本の製造企業の海外広報に携わる。2015年に退社。現在はエヌ アンド エー株式会社 専務取締役就任。



東京の大学受験に失敗 そのまま東京に住みつく

私の人生を振り返ると、ほとんどが行き当たりばったりで、順序立てて話せるようなキャリアではありません。岡山生まれの大阪育ち。東京の大学を受験し不合格だったにもかかわらず、東京に魅せられて、大阪に帰りたくなくなっていました。大学では演劇を学ぶつもりだったので、それなら大学でなくても同じことだと、東京の演劇学校に入りました。卒業後、懇意にしていた先生が、イタリアの日本文化会館で教鞭を執ることにになり、アシスタントとして雇われるというのでついていきました。

イタリアで、開放的な自分に生まれ変わる

ローマに着いたその日のことを思い出すと今でも鳥肌が立ちます。

私は、映画「ローマの休日」で知られるスペイン階段の上から街を行きかう人々を眺めていました。雲一つない青空、カラフルな服に身を包み、誰に遠慮することなく楽しそうにしゃべりしている人たち。閉塞的な日本とは対照的な、大らか

な街の空気にすっかり魅せられてしまいました。

私のスツケースの中には、黒かグレーかベージュの服しか入っていませんでした。それらをすべて捨て、持ってきたお金のほとんどを使ってカラフルな服を買い、長かった髪をショートカットにしました。こんなにも違う自分になれるのだと、その日から何も怖くなりました。英語に対してはひどくコンプレックスがあったのに、イタリア語は間違っても恐くなくなつて、積極的に話していたらあっという間に日常会話ができるようになったっていました。

当時、イタリアでは『木枯し紋次郎』が大人気で、ちょっとした日本ブームでした。そこで、現地の国営ラジオテレビ放送から誘われて、日本の番組制作のチームに加わりました。

同時に、アルバイトで日本からの旅行者のツアーガイドをしました。この仕事のおかげで、ヨーロッパのほとんどの国とアフリカのモロッコも、自分でお金を払うことなく旅することができました。

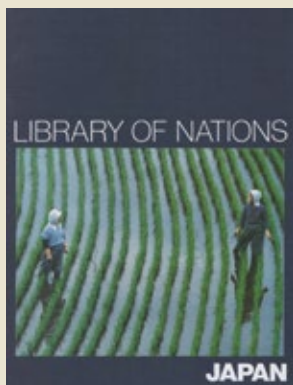
帰国後は、日伊合同のテレビ番組制作に1年間没頭しました。

新たな可能性を求め渡米

ヨーロッパにいて思ったのは、バイリンガルやトリリンガルは当たり前で、語学は武器にならないということ。イタリア語ができて通訳くらいしか仕事がなく、私は人の言葉をただ訳すよりも自分がしゃべるほうが好きだったので向いてない。そこで今度は西を見たら東へと、アメリカへ行こうと思うようになりました。

ニューヨークへ行き、1学期だけ大学に行くと、すぐに英語はしゃべれるようになりました。

英語ができれば仕事探しには苦労しません。日本の調査会社が調査員を募集していたので応募しました。私が渡米していたころの1975年から1980年代にかけて、日本の家電メーカーは大変注目を浴びていました。日本の製品が、アメリカの市場でどのように売れているのかをアメリカ全土の家電店を回って店員やお客さんにインタビューするという仕事を2年間続けました。



◀1985年、TIME LIFE社が発行した『LIBRARY OF NATIONS』の日本特集に、子育てをしながらキャリアを築いていた秋岡さんの記事が掲載されている。当時「女性管理職はわずか5.3%しかない」との記載もある。

アメリカにあつて、日本にはない 「広報」という発想

その時に感じたのは、日本製品はすごく評価され、人気があるということ。しかし、顧客のほとんどが、キヤノンや東芝というブランドは知っていても、それが日本の会社のものだということを知らない。

これはどういうことなのかと驚きました。C I（コーポレートアイデンティティ）という言葉は今でこそ一般的ですが、当時の日本企業にはそういう意識がありませんでした。広告・宣伝・広報にはお金を払わないのが日本の企業だったのです。

アメリカでは企業市民（corporate citizen）＝「企業も地域における市民である」という意識を持ち地域のために貢献するという考え方が普及していました。私はこれに興味を持ち、調査のかたわら、個人的にアメリカの企業の広報のあり方を調べたり勉強をしていました。

調査の仕事を2年ほどしたときに、この会社の社長から、同じ調査をヨーロッパでもしたいから行ってくれないかとオファー

がありました。部長というポストが用意されていましたが、その会社の企業文化を見る限り、女性が上に上がるのは難しいだろうと感じて帰国半年で退社し、それなら自分で起業しようと思い立ちました。幸いにも、アメリカ時代に知り合った広告代理店やPR会社とのネットワークがありしたので、2人のアメリカ人と資金を出し合つて、PR会社を興しました。

友人と起業 広報専門の会社を

調査会社にいたときに、日本企業がアメリカであまりにも知られていなかったことにショックを受けたことから、コーポレートPR専門の会社を立ち上げました。

PR（パブリック・リレーションズ）はアメリカで生まれたビジネスです。移民の多い国で、出身も言葉も文化も違うからこそ、いかに共有意識を持たせるか、そのために、企業は広報活動が必要だったのです。日本では、まだそういう学問は確立されていませんでした。

3人で始めた会社はすぐに軌道に乗り、1年後には売上

8000万円を達成。3年後には社員30人を抱えるようになっていました。

しかし、3人も船頭がいると会社はまとまりません。10年後には解散をしました。

日本に進出する 外資系企業のCSRに携わる

それまでは、アメリカに進出する日本企業のためにPR広報をしていましたが、時代は変わり、輸出よりもインバウンドのほうが景気がよくなってきました。

そこで、日本に進出する外資企業のために、PR活動のコンサルティングをするようになりました。

印象に残っているのは、ドイツのメルセデス・ベンツジャパンと仕事をしたときです。

彼らが最初に言ったのは、「車のことは考えなくていい。ドイツで実践しているCSR（corporate social responsibility＝企業の社会的責任）を日本でどう展開できるか考えてほしい」というものでした。

親会社のダイムラー社は、第二次世界大戦のときの反省もあり、CSRに力を入れていたのです。

中でも現代アートの育成に力を入れていて、アート作品の企業コレクションとして、評価の定まらない若手作家を支援していました。

ダイムラー本社より、日本の若手アーティストを海外に住ませ（アーティスト・イン・レジデンス）、フランスのモンブランカンで作品を作らせ、日本で展覧会をするということが可能か調べてほしいという依頼を受けました。この仕事を12年間続けました。今はメルセデス財団が「メルセデス・ベンツアート・スコープ」として、この活動を引き継いでいます。

企業が市民として何をやるかがパブリック・リレーションズであり、CSRです。日本でもサントリーが美術館を持つなど、CSRに取り組む企業は増えていますが、外資系企業のそれとはずいぶん考え方が違うように思います。

現代アートで町おこし

現在は、エヌ アンド エー株式会社専務取締役という立場で、現代アートを中心とした、芸術文化施設の企画・運営・マ



表紙写真: 倉山直哉



写真: Atelier Tsuyoshi Tane Architects



▲秋岡さんが取り組んでいる、(仮称)弘前市芸術文化施設発のニュースレター「弘前創造通信」。(仮称)弘前市芸術文化施設は、シードル工場として使用されていた古い煉瓦倉庫を、最先端のアートを体験できる現代美術館として生まれ変わらせるプロジェクト。2020年春に完成の予定。

ネジメントやパブリックアート・コーポレートアートのコンサルティングなどを行っています。

なぜ、現代アートなのか。現代アーティストは評価の定まった作家とは違って、今を生きる作家です。これから生きる子どもたちが、今を生きている作家と美術館で出会い、ワークショップなどを通じて学ぶことができるのが最大の魅力です。

私も企業が運営している青森県にある十和田市現代美術館では、1年の3分の1は雪深く野外活動ができません。この時期に、子どもたちは学年を越えてバスで美術館を訪れ、先生や学芸員といっしょに工作や美術の授業を行います。驚きの作品に出会い、感動して、想像力を膨らませて一日を過ごします。このような活動を通じて、人口6万人の街に年間14万人が来場します。現代アートは町おこしの核にもなるのです。

茨城県の過疎の町で現代アーティストによる芸術祭を行ったときには77万人が訪れました。

(仮称)弘前市芸術文化施設は、産業遺産である吉野町煉瓦倉庫を再利用して、現代アートを中心とした美術館としてリニューアルするプロジェクトです。弊社のほか7社が共同出資し、2020年4月の開館を目指しています。市民活動や交流の拠点としても活用し、約15万人の来場者を見込んでいます。

東京には、年間50万もの来場者が訪れる美術館がたくさんありますが、地方にはありません。しかし、そこに現代アートの拠点を作ること、人の流れを作り、街に活力を生み出すことと期待しています。

流れに任せて柔軟に変化しながらここまでできた

今はたまたま、アートをテーマとして仕事をしていますが、振り返ってみると、そこを目指してきたわけではなく、目の前にあるものをつかみ、成長している分野に飛びつき、いろいろなことを重ねてきた結果、ここまで流れてきました。

みなさんの参考になるかわかりませんが、どんな状況でも柔軟に受け入れ、変化し、成長していけることが、女の底力だと思います。

◆ 2018年6月16日講義より

「3つのもったいない政策」を推進した滋賀県知事時代の挑戦とその成果

だれも注目しなかった泡沫候補であった嘉田さんは、自公民260団体が支援する現職候補を破り、奇跡の当選を果たした。既存の勢力から反発を受けながらも「無駄なものは作らない」政治を貫いた嘉田さんに聞いた。

前滋賀県知事 **嘉田 由紀子さん**

【プロフィール】 京都大学農学部卒業。アメリカ・ウィスコンシン大学大学院に留学後、京都大学大学院に進学。在学中、結婚・出産。2児を育てながら学業を修める。琵琶湖研究所研究員として働きながら京都大学農学博士号取得。滋賀県立琵琶湖博物館統括学芸員、京都精華大学人文学部教授等を歴任し、2006年7月2日の滋賀県知事選に勝利して全国で5人目の女性知事となる。2014年勇退。2017年までびわこ成蹊スポーツ大学学長。



母の苦勞を見て、 社会を良くする道を模索

埼玉県本庄市の養蚕農家に生まれました。母は教員をしていましたが、結婚により仕事を辞め、農家の嫁として身を粉にして働きました。働き過ぎがたたって結核になると実家に帰され、私もそこで育ちました。当時、ストレプトマイシンという画期的な薬ができ、結核は不治の病ではなくなりつつありましたが、仕事を奪われた母にはそれを買うお金がない。「マイシンさえあれば」という母の苦悩の声は未だに耳に残っています。

子ども心に、「なぜ母はこのような苦しい目に遭わなければならぬのか、社会を良くするために勉強したい」と強く思うようになりました。当時、「女に学問はいらない」と言われた時代でしたが、母が爪に火を灯すような想いをして私を大学に行かせてくれました。京都大学農学部合格し、女人禁制の探検部に入部。アフリカのタンザニアに住みこみ、フィールドワークをしました。コップ1杯の水を得るために片道1時間も歩く人々を見て、水や環境問題に強い関心を抱くようになりました。

ちょうど1970年代ごろから地球規模で環境問題が注目されるようになっていました。環境学を学ぶためにアメリカ・ウィスコンシン大学大学院に留学すると、指導教官から「水問題について学ぶならアメリカより日本の農村研究をすべきだ」と言われ帰国。琵琶湖湖畔の農村生活の変遷について研究しました。そこから滋賀県との縁ができ、京都大学大学院の博士課程を修了後、琵琶湖研究所員となりました。1996年開館の滋賀県立琵琶湖博物館の開設にも企画段階から深く関わりました。

私が大学を出た頃は、女性には会社説明会にすら参加できませんでした。私は母の苦しむ姿を見てきたので、絶対に自分でお金を稼げるようになったかった。そこで学者になる道を選びました。論文を書くために学者になるのではなく、社会を良くするために学者になるのだと思っていました。ところが、思いがけず政治家の道を志すことになりました。

膝突き合わせて話せば 反対派も理解してくれた

2006年、56歳のときに「税金の無駄遣い、自然破壊、子どもを

生み育てることのできない地域社会は、もったいない」を合い言葉に、新幹線新駅の建設凍結、県内に計画中のダム凍結見直し、廃棄物処分場の中止などを主張して滋賀県知事選挙に出馬しました。選挙活動において、私がこだわったのは「くらし言葉」と「ざぶとん会議」です。

くらし言葉とは、政治の話をするのに難しい言葉を使わないということ。だれにでもわかる普通の言葉で話すよう努めました。

ざぶとん会議とは、少人数で膝を突き合わせて、地域の人たちの本音を聞くということ。表向きはダム推進派、新駅賛成派の人たちも、よくよく話を聞くと、「ダムができていいことばかりではない。河川改修をして堤防強化をしてくれるなら、ダムはいらない」、「新幹線に乗りたければ京都駅に行けばいい。それより私は孫の顔が見たい。だから子育て支援に力を入れてほしい」そういう本音がたくさん出てきました。

大学で社会学を学んだとき、個人的意見と集合意見には必ずズレがあるという理論を学びましたが、まさにそのとおりだと実感しました。



▲一期目の選挙当選祝い、孫たちに囲まれて



▲子育て支援政策を大津市の越市長と保育園で語る



▲防災会議での知事挨拶



▲県議会での知事答弁は8年間で2400項目にのぼる



▲滋賀県出身西川貴教さんがイナズマロックフェスを企画・提案



▲時には地元のお祭りに参加。長浜市川道のおこないにて

手漕ぎ船が 軍艦に打ち勝った

選挙戦は、それは厳しい戦いでした。片や、自公民260団体が支援する現職候補、対する嘉田陣営は、地盤、看板、カバンなしの泡沫候補。軍艦vs.手漕ぎ船の選挙戦だと言われたものです。選挙戦が始まったときの最初の立会演説会では、現職候補には500人の人が集まりましたが、こちらは20人。マスコミも取材に来ません。ところが、そのわずか20人が「あなたの熱意はわかった」と、一人あたり1500枚ものビラ配りを手伝ってくれ、最終的には、得票数21万票。現職候補に3万票の差をつけて当選を果たしました。

ハコモノはもういらない 本当に大切なこと

私の政策は、何かを「作る」ではなく、「作らない」政策でした。新駅も作らない、ダムも作らない。納税者は賛同してくれましたが、多方面に想像を超える抵抗勢力があり、何度も心が折れそうになりました。でも、そのたびに私に投票してくれた一人ひとりの「鉛筆一本の勇氣」を思い起こします。すると住民の方たちに背中を押して

もらっているような、勇氣が湧いてくるのです。

ハコモノは作らない代わりに、ソフト面の充実をしつかり推進してきました。その結果、滋賀県は一人住まいの老人世帯数は全国最下位です。

老人を孤独にしない。お互いにケアをし合う社会です。私自身が仕事と子育てとの両立に大変苦労したので、子育て支援にも重点を置きました。母子福祉の充実や、求職活動中、子どもを預けることができるマザーズジョブステーションを全国に先駆けて作りました。若者の正規雇用を増やし、企業の人材確保を行う「三方よしづくり事業」も進めました。

結果的に、未婚率は大津市が全国で2番目に低く、人口あたりの出生率は全国2位。男性の平均寿命は滋賀県が全国1位です。

ハード、ソフト、ハートの バランスをとれるのは女性

私は今、琵琶湖の環境保全に力を注いでいます。琵琶湖は約400万年の歴史を持つ世界有数の古代湖であり、60種を超える固有種が生息する生命の宝庫でもあります。さらに、近畿約

1450万人の水源地ともなっています。万一、原発事故が起きたらその影響は計り知れません。命を守る防災減災も進めてきました。私たちの生きる環境を守っていくためには、ハード、ソフト、そしてハート、この3つが大切です。そして、こういうことをバランスよく考えられるのは案外女性のほうなのです。

女性政治家が増えたら社会は変わります。ぜひみなさんといっしょに変えていきたいと思います。

